

やまがた紅花に新たな光

オガル(株) 食・生産・観光をつなぎ産業化へ



オガル株式会社

〒990-2493 山形市美畑町4-31
☎050-3528-5719

かつて「米の百倍、金の十倍」と称され、江戸時代の山形の繁栄を支えた「最上紅花」。その紅花生産・染色加工システムは日本農業遺産にも認定されており、本県を代表する歴史的・文化的資源の一つである。一方で、紅花を将来にわたって地域資源として守り、育てていくには、文化的価値の継承に加え、産業として持続可能な仕組みを構築し、経済的な循環を生み出していくことが欠かせない。

そうした課題意識のもと、建設・不動産分野で培った知見を活かしながら、紅花の新たな産業化に取り組んでいるのが、オガル株式会社（山形市）代表取締役の佐藤貴俊氏と、同社で事業推進を担う小関大介氏である。食と観光と生産現場を有機的に結び付ける紅花循環経済構想「BENINOMY（ベニノミー）」を推進している両氏を訪ねた。

■「最初は雲をつかむような話」

佐藤氏は宮城県出身。建設業界で23年間経験を積んだ後、山形市への転勤を機に、2018年に遊休不動産の活用コンサルティングを手掛けるオガル株式会社を設立した。社名の「オガル」は「成長する」を意味する東北地方の方言。

一方、小関氏は山辺町出身。高校、大学で建築を学び、民間住宅会社にて営業、設計・施工管理、支店運営まで幅広く経験してきた。現在はオガル株式会社において不動産活用や空間プロデュースを起点に、地域の観光地域づくり法人DMOや自治体、農林水産省関連事業など、地域づくりに関わる業務を担っている。

そんな二人が畑違いともいえる紅花事業に関わるきっかけとなったのが、大手旅行会社からの相談だった。山形市の助言を受けて、DMOさくらんぼ山形（山形市など村山地域7市7町で構成）が実施主体となる農林水産省「農泊推進対策事業」のディレクションを担うこととなったのである。「最初は雲をつかむような話で断ろうと思った」と佐藤氏は振り返る。しかし、地域資源としての紅花を掘り下げていく中で、従来とは異なる事業化の可能性が見えてきた。

■「紅花の黄色素に着目」

紅花といえば、多くの人が染料としての「紅（赤）」を思い浮かべる。だが、花に含まれる赤色素はわずか1%未満とされ、伝統的な紅餅づくりの工程では、赤色素を取り出すために黄色素を洗い流してきた歴史がある。二人が着目したのは、まさにこの黄色素だった。

黄色素は食品分野において天然由来の着色素材として活用できる可能性を持つ。「山形産紅花を食の分野で展開できないか」（小関氏）。そんな発想が事業の出発点となった。

こうして生まれたのが、「BENIBANA（紅花）」と「ECONOMY（経済）」を掛け合わせた造語「BENINOMY（ベニノミー）」構想である。紅花を軸に食、観光、生産を相互に結び付け、地域内で持続的に価値を生み出す産業構造へと再構築していくという挑戦だ。

構想の具体化に向けては、農林水産省事業や観光庁のインバウンド関連支援事業（観光コンテンツ造成支援事業）などを活用しながら、紅花関係者との意見交換、ワークショップ、モニターツアーを重ねた。こうした取り組みを経て2024年に、山形市内の飲食事業者、観光事業者等で構成する「紅花推進協議会」が設立された。会長に山寺立石寺住職の清原正田氏が就任し、オガル株式



紅花の生産拡大が商品開発の大前提に。写真は昨年の収穫作業。今年度は紅花の振興と普及に長年にわたって取り組んできた河北町、中山町でも栽培に取り組む



販路拡大が期待される乾燥紅花



台湾での商談会に出品した黄色素を活用したクラフトビール

会社が事務局を務めている。

■「乾燥紅花で商品展開を」

協議会が掲げるコンセプトは、「染めるための赤、味わうための黄」。紅花の価値を守りながら、紅花の新たな魅力を食や観光へと広げている。その象徴的な取り組みの一つが紅花の黄色素を活用したクラフトビールを開発。軽やかな味わいの「ベニバナエール」は酒田トラディショナルビール（酒田市）が、キレのある「ベニバナラガー」は蔵王ブルワリー（山形市）が醸造を担当。黄色の鮮やかさが印象的で、色彩の美しさと地域性を兼ね備えた商品として発表された。完成試飲会でも参加者から好評を得た。紅花は「見るもの、染めるもの」というイメージが強かっただけに、多くの人に新鮮な驚きを与えた。

商品展開の中でも、特に力を入れているのが、摘み取った花卉をそのまま乾燥させた干紅花「乾燥紅花（乱花）」の販路拡大である。乾燥紅花は、パン、そば、うどんなどの食品加工向け素材として期待されている。加えて、山寺を訪れた台湾人観光客が、土産品として乾燥紅花を買い求める姿も見られ、国内だけでなく海外市場への可能性も広がっている。山形銀行、山形県主催による台湾・台北市での商談会にも参加し、

中華圏を視野にいれながら、販路拡大の可能性を探っている。

■「生産力を高めることが大前提」

「紅花循環経済構想」を本格的に進めるうえで、商品開発や販路開拓と並んで欠かせないのが、安定供給を支える生産体制の確立である。現在の紅花栽培は文化継承・保存等を目的とした取り組みが中心で、紅花



オガル(株)が事務局の紅花推進協議会が農林水産省の「ディスカバー農山漁村」に選定され表彰を受けた(2025年12月19日)

単体で生産者所得を十分に確保できる段階にはまだ至っていない。

小関氏は「私たちが目指すのは、紅花で農家がきちんと収入を得られる仕組みをつくること」と語る。

2025年には、山形市内の圃場で栽培を行った。今年度は中山町、河北町を生産拠点に生産拡大を図っている。

河北町は紅花資料館を有し、紅花振興と普及に長年取り組んできた地域である。雑草処理や連作障害といった課題を抱えながらも、機械化や土寄せを取り入れた栽培体系を確立し、継続的な生産を実現している。

一方、中山町は、紅花と米によって財をなした豪農文化が色濃く残っており、国指定重要文化財「旧柏倉家住宅」を擁している。伝統的な最上紅花栽培に加えて、現在の需要に対応しやすい「トゲ無し紅花」の栽培にも取り組んでいる。さらに、ベテラン農家の指導のもとで、若手農家が栽培に参画する動きも生まれており、担い手のすそ野拡大にもつながっている。

■「農山漁村の宝に選ばれる」

紅花の産業化に向けては、学術・研究機関との連携も進んでいる。山形大学では、紅花の健康機能性に関する研究が進められており、山形県工業技術センターや慶応義塾大学先

端生命科学研究所では、有効成分の解析評価、食品利用の可能性に関する研究が行われている。

さらに、東北経済産業局の「TOHOKUブランド確立促進支援事業」にも採択され、ブランディングやマーケティング、知的財産の各分野で専門家の助言を受けながら、新商品開発や価値訴求の高度化に取り組んでいる。

こうした一連の活動は対外的にも高い評価を得ている。紅花推進協議会は昨年、農林水産省主催の「第12回ディスカバー農山漁村の宝」において、全国公募454件の中から優良事例30件の一つに選定された。選定後には農林水産省での選定証授与式に加え、首相官邸で開催された交流会にも参加し、やまがた紅花の魅力と今後の可能性を広く発信する貴重な機会となった。

佐藤、小関氏は「私たちは建設や不動産の出身ですが、その視点で地域を見つめ直した結果、紅花という大きな可能性を持つ資源(宝)にたどり着いた。紅花推進協議会の活動を通して、生産者、観光関係者、飲食事業者、研究機関、行政、活動を後押ししてくれた山形商工会議所など、多様な主体と連携しながら、山形の紅花文化に新たな光を当てたい」と語った。

やまがた舞子を育てる会 新規会員募集中!!

法人・個人に限らずどなたでもご加入いただけます。
(年会費 1口 30,000円)

「やまがた舞子を育てる会」は伝統芸能後継者の育成および資質向上を支援することを目的としており、年2回の発表会などを通して「やまがた舞子」の支援と利用促進を図っております。

山形の伝統芸能保存伝承にご協力賜りたく、是非ご入会を検討くださいますようお願い申し上げます。

やまがた舞子を育てる会
〒990-8501 山形市七日町3-1-9
【山形商工会議所内】 TEL. 023-622-4666